

セミナー報告

ERINA 賛助会セミナー

日中韓の相互理解へー多文化共生教育の現場から

日 時:平成29年5月17日

場 所:朱鷺メッセ中会議室201

講 師:上越教育大学大学院学校教育研究科教授 釜田聡

1. はじめに

(1) 私と日韓

30歳代半ば頃、上越教育大学附属中学校に在籍していたとき、当時の学長からの指示で、韓国放送公社(KBS)の取材を受けながら日韓関係の授業を行った。当時は1990年代であり、1982年に歴史教科書問題が話題になってまだ日が浅い時期であったので、韓国のテレビ局がやってくるということで身構えた。1週間ほど、社会科の同僚と夜も寝ないで準備をした。準備をしながら、「こんなに慌てて準備しなければいけないとは情けない。子どもたちの前で授業をしていたこの10年間は何かだったのか」と深く反省し、もっと勉強しなければいけないと感じた。

そのご褒美として、学長から韓国に連れて行ってもらった。日本の歴史教育研究者の代表者として学長がシンポジウムに登壇し、披露した歴史認識について、厳しい激論が交わされた。しかし、その後の懇親会では、あれだけ激論を交わしていた皆さんが仲良く酒を酌み交わしている姿を見たとき、私が日本で聞いていた歴史認識の戦いとギャップにショックを受け、さらにしっかりと勉強すべきだと気付かされた。

その後、上越教育大学附属中学校で韓国の中学生とホームステイを含めた交流が始まり、約20年間続いた。私も2000年頃、いわゆる江戸時代の韓流ブームといわれていた「通信使」の教材化を図り、日韓の子どもたちに共通の教材を活用して授業を行った。自分自身、日韓の交流、相互理解について学び、それを実践研究として公にし、研究を継続してきた。今も

日韓の国際理解教育に関する研究が続いており、いろいろな成果と課題がある。マスコミ等で間接的に見聞きしていることと実際の交流は違うので、できるだけ直接交流する意味があることを切実に感じている。

(2) 私と日中

21世紀に入ってから、中国に関心を持ち始めた。北京でちょうど反日デモが起きているときに国際理解教育に関する学会があり、迷ったが行くことにした。北京の大学の先生方に温かく迎えていただき、「北京での200人規模の反日デモは、人口比でいうと日本では20人規模といえる。過激な反日運動をしている人たちは、北京でもちょっと違った立場の人たちだ」という話をされた。マスコミ報道を通じて形成される感覚的なイメージと、現地の方々が実際にどういう気持ちでそれを見ているのかということの違いを、現地で感じてきた。

北京の会議で、北京のある教員から次の発言があった。

「私の小さな娘の話をお願いします。娘はマンガのドラえもんに描かれている日本の子どもたちのイメージから、日本人は子どもときはいいい子なのに、大人になると、どうしてあんななの?と質問します。」

「あなる」とはテレビに出てくる日中戦争時代の様子だ。マスコミやマンガからしか日本の情報を受け取らない子どもにしてみれば、『ドラえもん』に出てくる子どもたちと日中戦争時代の日本人が一直線上にあるだろうことも、経験上、分かってきた。

10年前、北朝鮮国境の町を研究調査で訪れたとき、脱北者の家族がまさに川を渡っていて、それを中国側が救出している

シーンを目撃した。目の前で起きていることと、マスコミ等で話題になっていることが繋がった瞬間だった。この先、中国について研究するにしても、もっと事実を極めていく必要があると感じた。

(3) 私と東アジア

中国への足がかりのヒントを与えてくれたのは、北京師範大学の姜英敏先生だ。韓国にも親族がいて、中国で生まれ育った優れた教育研究者である。筑波大学に留学経験があり、日本語、韓国語、中国語をすべてマスターしている。その姜先生から「日本人にとって中国を理解するのはハードルが高いだろう。朝鮮半島を通じて中国を理解してはどうか」という提案があった。これを聞いて教育研究上の迷いが消え、未来が見えてきた。

日本学校教育学会では、東アジア学校教育スタディツアーを継続的に実施している。主に学校現場を回るものだが、韓国、北京、台湾、上海、シンガポール、タイに共通している課題が見えてきた。どこの国もグローバル化に向けて、国家を挙げてもかなり強烈な底上げを行っている。韓国は、20世紀末のアジア通貨危機によって経済が非常に困窮し、そこからグローバル化に大きくシフトする時期に入ってきた。北京、台湾、上海などは、少子化政策をとり、あるいは社会的に少子化にならざるを得ない地域である。これらの地域の親は、「借金してでも子どもに高い教育を受けさせたい」という願いをもつ。子どもにすると、それが時にはプレッシャーになり、ひずみが出てきている。これは東アジア全体の課題でもある。

実は、今年の私のゼミ生20名のうち8名

が中国からの留学生だ。その8名のうち6名が日本あるいは中国の民間企業への就職を希望している。彼らがいることによって、その他12名の日本人と私自身には非常に勉強になっている。彼らは授業の内容について普通では言いにくいことを言ってくれ、存在感を發揮している。日本の学生たちも中国の学生たちと共に学び、グローバル化の一端を学んでいる。

2. 日韓の相互理解を旨とした研究

私の研究テーマである「歴史教育研究—日韓中の国際理解教育」は、科学研究費で過去10年間ほど継続的に支援をもらっている。国内外の研究者・実践者と協力しながら、日韓、あるいは日韓中で時代ごとの課題を研究テーマに盛り込みつつ進めてきた。そのキーワードになるのが「歴史認識」だ。

(1) 学生間交流における歴史認識問題—友人関係のアプローチ

韓国の若者が友人関係を結ぶとき、「プライベートに踏み込む。友人を丸ごと理解したい」という傾向がある。ところが、日本の若者に共通するのは、「ある程度の距離を保ちつつ、友人関係を結ぶ」という傾向だ。韓国の若者は初対面でも、相手の年齢や家族のことを聞く傾向がある。大学生になると、ガールフレンドやボーイフレンドの有無やさらに踏み込んだ内容まで聞いてくる。事前に指導されているにもかかわらず、だいたい日本人学生はそれで戸惑ってしまう。韓国の若者は、「日本人にはシャイな人が多く、人間関係を育むまで慎重である」という事前指導は受けているが、習慣でついストレートに聞いてくる。最初の出会いで、双方の価値観がぶつかり合い、どうやって付き合っていけばいいのか、困惑する若者がいる。

それはそれで、異文化を理解するアプローチにはなる。しかし、せっかく仲良くなった、中学生にも大学生にも共通するのは、歴史問題が出てきた途端、場が凍ることだ。ある日、大学生でディスカッションの場を設け、教育について話をしていた時、韓国の大学生が領土問題の話題を

出してきた。ところが、日本側は領土問題について明確に意思表示できない、あるいは説明できない。また、領土問題に限らず、日韓の歴史について関心をもつ学生は少なかった。

他方、韓国の若者は日韓の歴史について、多く語れる。いろいろな理由があると思うが、当時、大学入試で「国史」は必須科目だった。「国史」の近現代史の部分は対日関係がかなり入ってくる。入試にも出題され、マスコミでも常々報道されているので、韓国と日本の若者の歴史認識、あるいは歴史への興味・関心には極めて大きな開きあり、そこをなかなか乗り越えられない。

歴史を学ぶ意味や意義を子どもに理解させるのは、プロの教師でも大変だ。高校入試と大学入試に歴史があれば少しは勉強するが、放っておけば子どもはなかなか歴史に興味を持ってくれない。私も実際に韓国の中学生と大学院生に、ほぼ日本と同じ学習内容で授業をしたことがあるが、反応は韓国の若者の方が明らかに上だった。私が日本からやってきたゲストティーチャーであったことを割り引いても、歴史を見る眼差しが根本的に日本と韓国では違うように感じた。

(2) 日韓の学校教育における日韓相互理解に関する教育の現状

歴史教育研究を含めた歴史学研究には、大きな流れがある。1982年にいわゆる歴史教科書問題が起こり、歴史学あるいは歴史教育研究者が歴史教科書研究に取り組み始めた。その前の1975年に日韓の歴史学研究者が対話を始めているが、それが本格化するのが1982年からだ。そして21世紀にかけて、共通教材の作成が行われ、2002年5月から日韓歴史共同研究が開始された。この共同研究は、2001年10月に行われた日韓首脳会談において、歴史教科書問題に関連した正確な歴史事実と歴史認識に関する相互理解の促進が重要であり、そのために専門家による協議の場を設けることで一致したことを踏まえてのものである。

いわゆる有識者、日韓の歴史学の大家が研究成果を持ち寄ってまとめたものを発表しようとしたが、重要な部分について

は残念ながら完全な一致点は見出せず、両論併記で報告された。それに携わった日韓の歴史学者に聞くと、ものすごいバトルがあったそうだ。それぞれが国家の枠組みを背負った上での歴史認識についての議論なので精神的にも疲れる一方、どれだけ前進したのかについては明確な答えはなかった。

そこで、次に期待されたのが教室の子どもたちだ。2000年代のことで、多様な教育研究交流が進んでいった。いわゆる歴史だけではなく、例えばコミュニケーション、クラスのいじめの問題など、教室と教室、あるいは先生同士が手を結んでいこうと動いていった。

(3) 日韓相互理解に関する教育研究と教育実践

北京大学で行われた歴史学の対話集会に参加したことがある。そこで、中国の歴史学の第一人者と日本の歴史学の権威者が議論している場面に出くわした。議論の内容をよく聞いてみると、学術的・教科書叙述の検討が中心で、その議論は当然のことながら、専門化・細分化されている。他方、日韓、日中韓の教育現場で起こっている歴史教育上の諸課題は臨床的・複合的だ。

日本の子どもたちの多くには、歴史を学ぶ意義を感じてもらうことからスタートし、その上で日本と東アジアの関係に入っていないと、なかなかうまくいかない。結果として、多方面からのアプローチが必要だという結論に行きついた。今は歴史教育を中心にしながらも、いろいろな角度から迫ろうと努力している。

(4) 歴史教育実践（国際理解教育の実践）と教師教育

10年前に「中学校社会科教師における歴史認識に関する実態調査」を行った。調査対象は新潟県100カ校の中学校社会科教員、鹿児島県100カ校の中学校社会科教員。質問方法は紙調査法（無記名）で、約40%の回収率で157名から回答があった。

「これまで、ご自分が教えてきた歴史教育を振り返り、どのように思いますか」の問いに、もっとも肯定的に捉えられている答え

表1 歴史教育についての日本の中学校社会科教師の肯定的評価

	はい	いいえ
受験があることを意識して教えてきた。	74	70
「民主主義や平和の歴史を教えること」を心掛けてきた。	59	84
「歴史は現在を考えるために学ぶ」と教えてきた。	57	78
おぼえる学習を重視して教えてきた。	46	87
「歴史は未来を考えるために学ぶ」と教えてきた。	61	71

(表中の数字は人数)

表2 日本と韓国の相互理解のための歴史教育・歴史教育研究の方途として重視すべきこと

	はい	いいえ
歴史の見方・考え方をはぐくむ歴史教育	80	68
人権を重視した歴史教育	69	75
日本と韓国の相互理解をめざした歴史教育	72	70
近現代史を重視した歴史教育	59	71
東アジア史を重視した歴史教育	47	81

(表中の数字は人数)

は、「受験があること」だった。入試を意識しながら「民主主義や平和の歴史を教えること」を心掛けていたという先生が非常に多かったことには、私自身、非常に救われた(表1)。

「日本と韓国の相互理解のための歴史教育・歴史教育研究の方途として重視すべきこと」の問いには、「歴史の見方・考え方をはぐくむ歴史教育」が最も多かった(表2)。

自由記述の回答の中にも、注目すべき記述が何点か挙がってきた。10年前の調査だが、今のこの時代でも同様の答えが出てくるのではないだろうか。

①教科書叙述

「自虐史的記述があるのではないか」というコメントを寄せてきた先生がいた一方、「日本の過去、過ちをきちんと記述すべきである」という意見もあった。凡そ、この二通りの意見が寄せられた。「教科書には明確に書かれていないのではないか」という捉え方の先生もいた。その他、先生方自身が自信を持っていない、教科書に書かれていることを子どもたちに自信を持って語れない、という先生方の本音も書かれていた。

②歴史教育実践

1910年の日韓併合、1945年の日本の敗戦までをどう教えられるかについて、教科書には断片的に出ているが自分なりの考えがまだ持てない、という先生がいた。

この方は、中学校の社会科の教員だが、それでも日々悩んでいる、という素直な悩みを挙げている。さらに、「加害者日本・被害者韓国の構図が強すぎると、現在及び未来の日韓関係を構築していく際、対等なパートナーシップを考える際の弊害となる可能性があるのではないか」という意見をもつ先生もいた。

多くの先生方が悩まれていることだろうが、「北朝鮮の現状と歴史、韓国とのかかわりをどのようにとらえ、生徒に教えるかについて苦悩している」。実は韓国側の歴史教育者の中にも、同様の感想を持っている方がいるようだ。中学校の歴史教科書を見ていただくと、朝鮮半島でずっと来て、突然、北朝鮮の記述が欠落する。朝鮮戦争後の韓国と北朝鮮の扱いは非常に難しくなっている。

③マスコミ、地域、保護者、生徒

マスコミ、保護者、生徒との関係については、「反日感情も含め、朝鮮半島の情報を鵜呑みにしてしまっている子どももいる」。もちろん、教員自身もそうだろう。そうした中で、どういう授業を構成したらいいかということにも迷っている。

地域や校区の情勢もさまざま。例えば、九州のある町では半分の子どもが韓国にルーツを持っている状況で、日本の教科書の内容をどう教えていくか。新宿の大久保周辺の小中学校でも同様のケースがある。

さらに、今後の日韓の相互理解に向けた日本側の提言として、次のようなものがあった。

①歴史教育の内容

「過去の事実をきちんと教えるべき」、「戦後の日韓関係を丁寧に教えるべき」、「近現代の日本の歩みは東アジア史の中では極めて異質で、日本がむしろ東アジアから多くのことを学んできたことを教えるべき」というものがあった。

②歴史教育の方法

「教えるための資料の充実が必要ではないか」という意見があった。もちろん、教科書はその都度全力を尽くして編集され、出版されている。しかし、1年経てば社会情勢は変わってくる。子どもの発達段階、地域によっても見方、考え方が違うケースもある。そういう時の補助的・客観的な資料として、現在いろいろなものが使われている。

例えば、ICTの発達により、インターネットの利活用が盛んになっている。しかし、ネット上に氾濫している情報を使う場合は非常に難しい問題もある。また、NIE(教育に新聞を)として新聞記事の記述を比較していく授業パターンもある。先生方自身ももっと工夫すべきではないかという意見も出てきた。「歴史に登場する人物の心情の考察も有効ではないか」という意見、韓国の立場から見た日韓の歴史を理解していったらどうかという提言もある。

③教員の資質向上

教員の資質向上について指摘している先生もいた。少数だが、「社会科の先生はもっとしっかりしないといけないだろう」とか、「学校内で交わされている意見で、アジアに対する偏見をもつ教員が非常に多い」という、教員の資質向上に関する指摘もあった。

④日韓の対話

「歴史教育交流の対話をもっとしっかりやってほしい」というのはもっともな意見だと思う。こうしたものに期待はするが、再三出てくる歴史の問題にどこかでピリオドを打ってほしいという意見や、マスコミで騒がれる度に授業が難しい状況になるということへのいら立ちのような意見もあった。

私たちが、先生方のこのような意見を少しでも解消し、反映できるような研究、カリ

キュラム・教材開発を行っていかうとしている。

3. 日中韓の相互理解を旨とした研究

一つの大きな流れとして、2007年、札幌で行われた日中韓のワークショップがある。韓国のユネスコから資金が出て、日中韓の有識者、教育現場の先生方が2泊3日の合宿をし、子どもたちのための教材を作ろうとスタートした。一般に、小中学生が世界を理解するために、住居・食物・衣服・音楽など3Fs (Fashion、Food、Festival) からスタートしていこうとするのは、決して悪いことではない。ところが、3Fsを理解した後の広がりがない。修学旅行、ホームステイ等の行事を組み込みながら、世界の子どもたちとの交流をなんとか学校教育に持ち込もうという努力しているが、一般的な授業単位では、ここまでが限界だった。

そこで2009年から、学校教育の場でこの3Fsを乗り越えていくような教材、カリキュラムを作っていこうという研究が3カ国でなされた。現在行われているのが、「異己理解共生プロジェクト」(2014年～)だ。文部科学省から引き続き研究費(科学研究費)をいただき、研究を進めている。実は、姜英敏先生の研究が異己理解の根底になるものとしてこの10年間進められており、これが合流して現在に至っている。

(1) 教材作成のためのアンケート調査

日本の上越教育大学附属中学校1年生119名と同志社香里中学校1年生80名(2011年12月～2012年1月)、韓国の京畿道・富川市カチウル中学校1年生200名(2011年12月15～20日)、中国の牛舎山一中実験学校7年生93名と北京十二中学校7年生69名(2011年12月)で、教材作成のためのアンケート調査を行った。

「狭い道なのに、道の真ん中を歩き、反対方向から人が来て自分からよけない人がいます。あなたはどう思いますか」という質問では、中国、韓国に比べ、日本の子どもたちに「許せない」傾向が強いことに注目できるかと思うが、「気にならない」という子どもも若干いた。

これが国ごとの傾向の仮説になるだろうと思っていたところ、京都と上越の子どもたちを分けると、上越の子どもたちの65%近くが「許せない」なのだが、京都の子どもたちは32～33%だった。つまり、国というより地域や学校によって違うように思える。考えてみると、この調査は12月に行った。上越と京都の子どもたちのこの時期に対するイメージ(道路が雪に閉ざされているか否か)には違いがある。日本はこうだ、中国はこうだ、韓国はこうだというデータを出すこと自体、かえって誤解を招くだろう。ましてや、十数億の人口を有する中国の、北京の一部の中学校だけを取り上げたところで、何の意味があるだろうか。これは「誤解や偏見を持つてはいけない」と言うときに使うべき資料ではないかということで、教材としては課題が少なからずあることが確認された。

私の聞く限り、中国や韓国では、たとえ相手が友人や先生であっても、自分の意見をしっかりと言うことが是だと教育しているようだ。「授業中、あなたの意見と友人の意見が対立したとき、あなたは自分の意見をきちんと主張できますか」という質問で意外だったのは、韓国の子どもたちの答えだ(「できる」が20%未満)。韓国側からは「田舎と都市部では違う」という意見が出た。地域性や学校による違いがあるので、データそのものを取り直すべきだという意見もあった。

「あなたは友人がよくない言動をしたとき、きちんと忠告することができますか」という質問に対しても、個人差があるだろうし、学校や家庭での指導の違いもあるということが、確認された。

(2) 主な学習活動

日本と韓国の大学生が次のようなものをビデオ教材にして、日本と韓国の小学校で実践した。

- ・ 「授業中、友人があなたの筆箱の中から黙ってボールペンを取り出し使い始めました。そうした行為についてあなたは どう思いますか」について考え、発表する。
- A 友人であっても失礼である
- B いやな気持ちがある
- C ほとんど気にならない

D 友人であれば当然である

- ・ 自分の考えと、その判断理由について説明する。
- また他の生徒の判断とその理由を聞き、自分と異なる考え方があることを再認識する。
- ・ 教師の提示した資料(3カ国のデータ)を見て日本、韓国、中国の生徒の考え方を知る。

(3) 成果と課題

日本の子どもたちの答えの大半はAかBで、予想される範囲だった。ところが、韓国の子どもたちはAとBを選択した子どもは少なく、CとDが日本より多いという結果が出た。中国と韓国からは、「日本人は他人のものと自分のものを区別して友人関係を狭くしているのか」という質問が来た。日本の子どもたちは、中国あるいは韓国に「そんなにいい加減でいいのか」という問いかけをしてくる。相手の人となり分からない中での紙上討論なので、結構厳しい意見が出てくる。

私たちが「3カ国の価値観で括れるだろう」と思っていたところ、実際にはそれぞれの国の中でも、都市部と農村部、あるいはグローバル化の影響を直接受けている学校とそうでない学校とで違う結果が見えてきた。日韓中で一括りにしてデータ提示をしていくのもなかなか難しい、ということが見えてきた。その成果を『日韓中でつくる国際理解教育』という出版物で、公表した。

その中に、韓国、中国、日本の地図を使用して学ぶ教材があった。地図中の地名表記をどうするかを、三カ国の研究者で真摯に検討した。例えば、それぞれ自国の児童・生徒に学ばせるための教材として、三カ国の共通教材とする場合の表記の方法についてなど、非常にデリケートな問題であることを改めて確認することができた。

(4) 「異己」理解・共生授業プロジェクト

三カ国の教材をつくることは、最後の最後で乗り越えられない課題があり、なかなか難しいことが再確認できた。それでは、次にどうすればいいかと慎重に検討した。2014年、日本国際理解教育学会・国

際委員会、「異己」という概念を使うことによって、東アジアの問題や目の前の自分たちのクラスをより良いものにできるのではないかという提案があった。「異己」とは、「価値多元化社会において異なる価値観や立場を持つ相手」を意味し、「異己」を理解することで個人間、国家間のコンフリクトを解決していけるのではないかとする、一つの仮説である。その授業実践の場面では、日常生活習慣や価値観について日中韓の小中高校生、大学生が対話を行い、逆転した価値判断基準を持つ集団がいることに気づき、その人たちの考え方を理解すると同時に、普段当たり前と思っていた自分の考え方を問い直していく、というのが目標だ。

(5) 「異己」との対話

授業は、クラスの中にも自分とは違う価値観を持つ仲間がいる、ということからスタートする。その人とまず話をする。例えば、小学3年生と6年生では、発達段階が違うため、集団の価値判断基準が異なることがある。その価値判断基準が異なる3年生と6年生とが対話を行う。それから国境を超える。例えば、小学校の社会科の授業でよくやる方法だが、子どもたちがインターネットを介して対話をする。そういう形で集団外の異己の認識をし、対話をしていく。

その先が非常に難しい。集団の中での対話を通じて共生に向かっていく。将来的に、そういう人たちと共に生活する、あるいは同じ地域で生活をする、同じ職場で仕事をするということを想定したとき、少なくとも義務教育の段階でも、そうした資質・能力の育成に着目した教育活動が必要であろう。そのうちの一つを紹介したい。

異己理解・共生のための授業

【シナリオ】

武(たけし)さんと毅(つよし)さんは、中学生です。二人は2年1組に所属し、とても仲のよい友人です。二人が在籍する中学校では、2年生になると、修学旅行に出かけます。今年は、2泊3日の日程で東京に行くことになりました。

【場面1】

修学旅行の1日目の夜のことで。たけ

しさんとつよしさんが、夜の自由時間のときに、部屋の中で、家から持ってきたお菓子(おやつ)を出して食べてよいことになりました。それぞれのおやつを出して楽しく食べ始めました。つよしさんは、自分も持ってきたチョコレートを出して食べようと思いましたが、トイレに行きたくなり、部屋から出てトイレに行きました。しばらくして、部屋に戻ってきたら、つよしさんが出しておいたチョコレートが全部なくなっていました。つよしさんは、困った顔をして、たけしさんに「ほくのチョコレート知らない」と聞きました。すると、たけしさんが、「ほくが好きなチョコレートだったので、みんな食べたよ」と言いました。

【問1】

たけしさんの行動についてあなたはどのように思いますか? 次の項目から自分に当てはまると思われる答えを選んでください。

- A ぜんぜん気にしない。仲良しなのであなたのもの、私のものと区別する必要がない。
- B 少し違和感はあるけど、問題にしない。二人の関係にも影響がない。
- C あまりいい気持ちではない。今度またこんなことがあると困る。
- D 不愉快、たけしさんの行動は理解しにくい。今後いい友だちにはしないほうがいいと思う。
- E その他

日本の子どもたちの多くは、「許せない」という選択をした。北京では、「そんなことで友達関係を崩すのは、逆に心が狭いのではないか」と批判する。そのまま放っておくと決していいことはないので、数時間かけて共生に向けさせていく。

最近、変化が見られた。子どもたちがだんだん言葉を選び始めた。顔も名前も分からない相手に対して、「こんなことを言って、相手を傷つけないか。少し、表現を変えてはどうか」という意見を表出する小学4年生が現れたのである。異なる価値判断基準をもつ相手に、どのような対話をすべきか考えようとする姿が見られるようになったことは、今後の教育実践研究の大きな手掛かりとなった。

4. 多文化共生社会

今までは、外国人や留学生が日本にやって来た段階でかなり摩擦が起き、この人たちを何とか救おうということで研究や教育的配慮が行われてきた。それが最近になって、マジョリティと言われるホスト側がコンピテンス(気付き、知識、スキル)を身に付けるべきだ、いわゆる受け手が努力すべきだ、という研究が進められてきている。

例えば、異文化交流には①言語への対応、②習慣への協力、③異質さへの寛容、④交流の工夫、⑤約束の履行、というソーシャルスキルが必要だという提案がなされている(中島・田中、2008年)。さらに、例えば韓国との関係で、学級活動などで日本なりのソーシャルスキルトレーニングが流行っている。これは、交流や実践を通じて相互浸透させていくという試みでもある。普段当たり前に行っていた学級活動の方法や教育観を変えなければならぬ。これは先生方にとっても結構つらい営みである。

5. 新しい学習指導要領—知識基盤社会・グローバル化に向けて

新しい潮流としては、「主体的・対話的で深い学び」、いわゆるアクティブラーニングの学習手法が推奨されている。国境を越えた対話を促していく学習がこれから推奨されていくので、まさに時流に乗るというか、こうした学習プログラムをもっと開発すべき時代に入ってきた。

現在の教育にESD(持続可能な開発のための教育)はかなり浸透してきているが、さらに2030年に向けて「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が組み込まれてくる。17のゴールが設定され、国政や教育にそれが浸透していくことが期待されている。例えば「目標4:すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」ことが国際条約で宣言されている。こうしたことも踏まえ、異文化コミュニケーションも当然、今後さらに推奨されていくことだろう。

結果的に、東アジア3カ国がこの「アジェ

ング2030」に向け、さらに人間として共通の課題である「平和と幸福の追求」、「自立」に向けて協力が進んでいく。コミュニケーションを基盤にしつつ、異己と自分との関係、理解不能な他者との共生へのアプローチの仕方といったものが、これからの東アジアの教育の課題であろう。

<質疑応答>

Q. 韓国の歴史教育はどのように変わっているか。

A. 高校と中学校の歴史教科書は、長い間、国定教科書だった。最近になって、日本と同様な検定教科書が認められた。これは、多様な歴史教育を認めていこうとする潮流だと考える。現在韓国で使用されている検定教科書のすべてを分析・検討したわけではないが、日本の植民地支配について、当時の国内情勢や東アジア情勢、日本との関係が詳細に記述されている。また、朝鮮半島が分断された歴史的経緯や現状について、当然ながら丁寧な記述が確認される。日本の歴史教育実践は、学習指導要領を踏まえ、教科書の内容を手掛かりに、教室内で対話をしながら歴史認識を磨き合おうとする教育実践もある。また、日本の歴史教科書は各社が切磋琢磨している関係で、記述内容や図版等に特色が見られる教科書もある。今後、多様な歴史教育実践の可能性が見える。

Q. 「チョコレート」の例のように、自分の基本的な考え方が相手のものと違うとき、どう噛み砕いたらよいか。

A. 子どもたちは、議論を戦わせながら、たかがチョコレートかもしれないが、所有について日中韓でかなり決定的な違いがあることを認識してきた。異なる価値判断基準をもつ集団があることを知った時、教育では自分の価値観や価値判断基準についてまず理解し、次にどうして相手がそういう価値判断基準を持つのか、その背景を理解するトレーニングをする。そして、将来的に「理解不能な他者」と共に仕事を

したり、社会の仕組みをつくったりしていく必要があるとき、どうやったらそれができるかというトレーニングをしておこうということだ。実際に小中学生が「共生」まで到達する実践研究は、今までない。相手のことを全部理解して受け止め、気持ちよく一緒にやろうということは、教育の理想であり目標でもある。これが達成できたとしたら、学校内はいじめが減少し、温かく思いやりのある空間になるだろう。いかに折り合いをつけながら、少しでも皆が居心地のいい空間をつくっていくというトレーニングが出来るのではないかという挑戦を今、しているところだ。

Q. 中国、韓国の歴史教育に客観的な正しさがあるかは疑問だ。そういう教育の中で、日中韓の差が出たとき、日本側が譲歩するのが本当の友好的なのだろうか。また、日本に移民が来た時、「チョコレートと友情とどっちが大事なんだ」という人たちが職場で他人の物を盗ったりすれば、日本の職場は混乱をきたすだろうし、治安の低下にもつながると思う。

A. まず、どこの国の歴史が正しいとか、どちらの歴史認識がよいかについて、私は述べてはいない。例えば、中国は多民族国家であり、民族に着目すると多様な歴史が存在する。この場合、中国のどの歴史が正しいのかは分からないし、判断すべきものではない。また、そうした多様な歴史を子どもたちの学びの場に持ちこむことは、考えていない。韓国の歴史についても、書かれているものをそのまま日本にもってきたところで、意味があるかどうか疑問だ。ただし、一つの歴史的事象について子どもたちが多様な見方を身に付けていくことが、社会科教育に求められている。多様な歴史認識の存在と歴史認識の現状を学ぶ場で、多様な歴史像を活用してもいいのではと考える。また、教育の場では多様性が豊かな教育を生み出すことがある。そうした意味で、日中韓のどの国の歴史が正しいのかを判断することが主たる目的ではないことを、ご理解いただきたい。

中国の「異己」という概念には「政敵」という意味合いもあるそうだ。そうすると、

異己はどこかに行ってほしい、消したいぐらいだというニュアンスもあるかもしれない。他方で、異己がいるからこそ私たちがいる、緊張感を持ってられる可能性がある、ということで教育の中でチャレンジをしている。アジアは日本にとって「鏡」だと言われ方をしている。中国や韓国を鏡として、自分たちの姿を照らし合わせたとき、自分の姿がよく見えてくる。異己を使うことによって、自分の価値観に気づいた上で、価値観の違う人たちとどう付き合うかを考える機会にしていけたら良いのではないか。今はいろいろな職場があって、敢えてそういう方々を雇っているところもあると聞いている。そういう方々とコミュニケーションをとっていくとき、少しでも知恵が出てくるのではないかという可能性を信じて、教育研究で取り組んでいる。

一点、補足がある。チョコレートの例は修学旅行で、和気あいあいと友人同士で楽しんでいる特別な空間での出来事である（修学旅行・友人）。そうした空間と一般社会の事例を比較すると、チョコレートの実践事例で取り上げている本質的な部分が見えなくなると考える。

Q. 日本にはどちらかというと「察する」というところがある。先生の「異己を認める」という話では、西洋文化でいうディベートをイメージした。そうした文化が進んでいる国だと、成果を求めるためにロビー活動みたいなものが同時に起こってくるが、日本は今までの教育からすると、そのあたりが苦手のイメージがある。それを変えていくのにディベートやリテラシーという言葉が使われてきたと思う。今後、「議論は戦わせても相手を受け入れる」という成果を出していく教育に変わっていくには、どのぐらいの時間をかける必要があるとお考えか。また、それが今、主力の方向になっているのか。

A. 私も欧米で学校教育を見てきたが、多文化、ジェンダー、多様性が当たり前で、多言語、多宗教が一つの教室の中で具現化されていて、「異己」などと言わなくても、子どもたち自ら見事にコミュニケーションをやっている。そういうところで採られている若者たちと、「察する」文化で育ってきた子どもたちが対峙したときに大

丈夫なのか、という心配がある。これは外へ出たときの心配だ。他方、日本ではまだ、1人の先生が30～40人の子どもたちを相手に、多様性や国際理解、文化について精一杯やっている中で、何とかできないか、ということからスタートしている。

ディベートやその文化については、自分たちが当たり前だと思っていたものと違う文化が多様に存在しているという感覚を、いつまでに、どうやって身に付けなければいけないか、に尽きるかと思う。グローバル化というと外にはばかり向きがちだが、「内なる国際化」は20、30年前から言われていて、実は学校教育がいちばん遅れている。先ず先生方がそうした感覚を身に付けて、それができたら子どもたちにも風穴を開けてもらい、無理のない範囲で一步一步進めていく、というのが大事なのではないか。

私は「グローバル」という言い方をよくしている。地域と世界は繋がっていて、先生方自身が世界と繋がることの必要性を、常に説いている。例えば、私の研究室から巣立ったある新任教員から、「30人のクラスの中に数名の外国につながるの児童がいる。子どもと保護者とのコミュニケーションが十分にとれない。また、その子どもの文化的背景、言葉、保護者の思いを先生が理解して教室に行く必要があるにもかかわらず、対話の仕方、子どもの理解の仕方を大学時代に学ぶ機会がな

かったことで、毎日が厳しい」という悲鳴が聞こえてきた。世の中では教育界が一番遅れているかもしれない。

Q. 「チョコレート」の授業で、子どもたちは最後にどういうことを導き出したのか。先生がファシリテーターのような形で収束させたのか、子どもたち自身が自発的に解決しようとして導き出したのかを知りたい。そして、そうした若者たちが育っていくとき、地域や大人たちがどのような見方をするのが求められるだろうか。

A. 授業はまだ進行中だ。クラスでの討論形式で行い、小中学校の道徳の授業でよくやるように、先生が児童・生徒の価値観を引き出し、ぶつけ合わせながら、討論させ、最後はまとめていく。今回は、「チョコレート」の例も含めたいくつかの 카테고リーに分かれての東アジアの中での対話（紙上討論）だ。子どもたちにしてみると、相手の顔、名前が分からない中でやり取りなので、かなりきつい討論も交わされた。それにもかかわらず、修正しなければならぬのではないかと、こういう言い方をすれば相手が傷つかないかもしれない、という子どもたちが出てきたことは大きな収穫だった。それは、その学級の子どもたちが、日常生活の中でいろんな人たちに対して配慮ができる集団になってきていて、それがたまたま今回結び付いている

のだろう。とはいえ、その次のステップがあり、意見交換のマナー、いわゆるグローバルソーシャルスキル、多様な他者とコミュニケーションするときの慎重さなどがあるかと思う。

さらに私たちの課題として、決裂寸前の一つの事例をどうしたら収束できるか、というプログラムを作成中だ。今年はそれを、ソウルと北京、さらに違う都市の子どもたちを巻き込んで、研究者・実践者が連携して、実践的・臨床的な研究として取り組んでいるところだ。できれば3～4時間ぐらいで収束するようにしないと全国に普及しないだろうと思っている。実践に長時間かかるようだと、特定の学校でしか実践できなくなる。数時間単位で、紙媒体等の使用で、実践ができるという状況までもっていきたい。

地域の役割については、例えば大学、地域、小中学校に分けるのではなく、できるだけ人的リソースを相互に交流させることができるかと思っている。例えば私たちの大学では、地域に住む外国に繋がりのある子どもたちを週2回呼んで、大学の学部生と院生が日本語支援や教科指導に当たっている。あるいは、教職員が地域の学校に出て行って日本語支援や教科支援をやっている。そこに地域の方々も参画し始めて、動いている。